

2021年 4月 4日(日) 関東学院教会 主日礼拝 説教要約

説教 「なぜ泣いているのか」 ヨハネによる福音書 20章1-18節 高橋彰

◆復活する

1 週の初めの日、朝早く、まだ暗いうちに、マグダラのマリアは墓に行った。そして、墓から石が取りのけてあるのを見た。2 そこで、シモン・ペトロのところへ、また、イエスが愛しておられたもう一人の弟子のところへ走って行って彼らに告げた。「主が墓から取り去られました。どこに置かれているのか、わたしには分かりません。」3 そこで、ペトロとそのもう一人の弟子は、外に出て墓へ行った。4 二人は一緒に走ったが、もう一人の弟子の方が、ペトロより速く走って、先に墓に着いた。5 身をかがめて中をのぞくと、亜麻布が置いてあった。しかし、彼は中には入らなかった。6 続いて、シモン・ペトロも着いた。彼は墓に入り、亜麻布が置いてあるのを見た。7 イエスの頭を包んでいた覆いは、亜麻布と同じ所には置いてなく、離れた所に丸めてあった。8 それから、先に墓に着いたもう一人の弟子も入って来て、見て、信じた。9 イエスは必ず死者の中から復活されることになっているという聖書の言葉を、二人はまだ理解していなかったのである。10 それから、この弟子たちは家に帰って行った。

◆イエス、マグダラのマリアに現れる

11 マリアは墓の外に立って泣いていた。泣きながら身をかがめて墓の中を見ると、12 イエスの遺体の置いてあった所に、白い衣を着た二人の天使が見えた。一人は頭の方に、もう一人は足の方に座っていた。13 天使たちが、「婦人よ、なぜ泣いているのか」と言うと、マリアは言った。「わたしの主が取り去られました。どこに置かれているのか、わたしには分かりません。」14 こう言いながら後ろを振り向くと、イエスの立っておられるのが見えた。しかし、それがイエスだとは分からなかった。15 イエスは言われた。「婦人よ、なぜ泣いているのか。だれを捜しているのか。」マリアは、園丁だと思って言った。「あなたがあの方を運び去ったのだしたら、どこに置いたのか教えてください。わたしが、あの方を引き取ります。」16 イエスが、「マリア」と言われると、彼女は振り向いて、ヘブライ語で、「ラボニ」と言った。「先生」という意味である。17 イエスは言われた。「わたしにすがりつくのはよしなさい。まだ父のもとへ上っていないのだから。わたしの兄弟たちのところへ行行って、こう言いなさい。『わたしの父であり、あなたがたの父である方、また、わたしの神であり、あなたがたの神である方のところへわたしは上る』と。」18 マグダラのマリアは弟子たちのところへ行行って、「わたしは主を見ました」と告げ、また、主から言われたことを伝えた。

聖書 新共同訳(C) 日本聖書協会 Japan Bible Society, Tokyo 1987, 1988

復活の出来事について、聖書は、特に4つの福音書は、誇張して大々的に宣伝するのではなく、より抑えた控えめに記そうとしているようです。イエスの身に何が起きたかという事態ではなく、復活のイエスと出会った人びとが何を知り、受け、信じたのかを大切に描いています。今年のイースター主日はヨハネ福音書のストーリーから、マグダラのマリアが復活のイエスに出会った出来事をたどり、復活が伝えるメッセージを確認したいと思います。マグダラのマリアは独りぼっちでイエスの墓に行くと記されます。マリアの個人的な体験を通してイエスの復活が語られます。

イエスの逮捕、そして急展開でなされた十字架刑と死の衝撃は、弟子たちの関係やつながりをもバラバラにし、孤立させたようです。まるで体が引き裂かれたように。そして弟子たちは、イエスに敵対した者たちがイエスに向けた迫害と殺意が自分たちにまで及ぶことを恐れて正体を隠し、家に引きこもっていました。

マリアはイエスの最も近くにいることを望みます。彼女が今できると思ったのは墓に行くことでした。すると墓を閉じた石が取りのけられているのを見ました。1節のあとに11節の出来事が続くのが自然な流れですが、2-10節が入り込みます。マリアがペトロとイエスの愛した弟子の二人のところへ走っていき、事態を伝えます。男性二人は、社会で証言を受け入れられる単位です。女性の証言、しかも一人では信頼され取り上げられない現実がありました。ここにも、マリアの孤立さが見られます。走っていったマリアの知らせを聞いた二人の弟子たちは墓に飛んでいき、中を確認します。ペトロと愛弟子の順序が競われているようです。のちの教会の

リーダーシップは彼ら弟子たちが担ってゆくことになりました。二人は、空の墓を確認した後、家(自分たちの引きこもる場所)に帰って行ってしまいます。マリアは墓で、イエスの死という喪失感、そしてイエスの遺体を失ったという驚きと悲しみに、一人取り残されています。愛する者の死においてでも取り巻く状況は異なり、分断されています。まるで今のコロナ禍の社会に生きるわたしたちの社会的距離、人の心の不安と温度差とも共通するかのようです。

マリアは外に立って泣いています。家、社会、世の流れの中に入れぬ人として。非力で、声も信用されない立場です。しかし過ぎたことを納得してやりすごすことも、切り替えることも、なかったかのようにすることもできないのです。マリアは泣きながら身をかがめて墓の中を見ます。すると二人の天使が見え、語り掛けられます。「婦人よ、なぜ泣いているのか。」と。彼女の悲しみにふれるはじめての言葉です。マリアは悲しみの理由、疑問、を吐露します。マリアはイエスの死を自分に起きた深い悲しみのこととして「あの方を引き取りたい」と願うのです。

振り向くとイエスが立っていましたがマリアは分かりません。「マリア」と呼ばれた声を聞いたときに(ヨハネ10:4)気づきました。振り向きラボニと呼んですがりつきます。イエスが生きておられ、変わらず自分に呼びかけ続けておられると、イエスとの確かな結びつきを確信したマリアは、イエスの言葉に促され、もう一度弟子たちのところへ出向き、人びとに驚かれることも恐れずに語ります。「わたしは主を見ました」と。